

氏 名	きのした あきら 木 下 昭
学位(専攻分野)	博 士 (人間・環境学)
学 位 記 番 号	人 博 第 360 号
学位授与の日付	平 成 19 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研 究 科 ・ 専 攻	人 間 ・ 環 境 学 研 究 科 共 生 文 明 学 専 攻
学 位 論 文 題 目	エスニック学生組織からみる「祖国」 ——フィリピン系アメリカ人にとってのフィリピン、そしてアメリカ——

論文調査委員 (主 査) 教 授 木村 崇 教 授 高橋由典 助教授 蘭 信三 教 授 竹沢泰子

論 文 内 容 の 要 旨

本申請論文は、アメリカ合衆国カリフォルニア州サンディエゴとサンフランシスコにおけるフィリピン系アメリカ人学生のふたつのエスニック学生組織を取り上げ、そこで展開される活動がフィリピン系アメリカ人というエスニシティとフィリピン人というナショナリズム、さらには遠隔地ナショナリズムの間を複雑にゆれ動く様を描き出すことによって、グローバル化した状況のなかで国境を越えて移動した移民たちがフィリピンとアメリカというふたつの国民国家とどのように向きあっているのかを明らかにするものである。

本論文では、まず、序章と第2章において先行研究にもとづいて鍵概念を検討し、本研究で主な対象とするエスニック学生組織の戦略的な位置づけを示して、ふたつの組織の概要紹介を行う。第2章では、従来の議論を検討し、国民、国民国家、そしてナショナリズムの関連からそもそも国民国家とは何かを考察する。誰もが国民国家に属するが、移民は移住によって居住する国民国家を移動し、移住先で他者として扱われ、ナショナリズムやエスニシティが覚醒されていくという一般的過程を確認する。

第3章ではフィリピン系移民の歴史と現状を、調査地であるふたつのコミュニティの状況を視野に入れながら概説する。第4章では、学生組織の活動とエスニック・スタディーズの展開からふたつの大学における多文化状況を比較し、フィリピン系アメリカ人学生がアメリカ人であると同時にフィリピン系であることに葛藤を感じる状況を比較分析する。また、学生組織の活動やコミュニティとの関連を通じてフィリピン系としてのアイデンティティを確認することによって、学生たちがそのプライドを取り戻す過程を描き出す。

第5章では、フィリピン系アメリカ人の活動特性を示すために、日系アメリカ人学生組織を比較対象として取り上げる。日系組織はフィリピン系組織と類似した活動を行いつつも、そのエスニシティはシンボリックなものでしかなく、フィリピン系のそれが依然として活発に機能している状況とは対照的であることを示す。第6章では、フィリピン系の若者が劇や映画などの芸術活動のテーマにしばしば選ぶフィリピン系の同年代の一世と二世との間に生じる対立から、アメリカ社会に色濃く残る人種差別とフィリピン系への差別からの解放(脱植民地主義)が依然として彼らにとっての課題であることを描き出している。

第7章では、フィリピンの民族舞踊と国民統合について考察する。なぜなら、学生たちにとってフィリピンの位置付けに大きな影響を与えているのが民族舞踊だからである。民族舞踊のルーツをたどると、それがフィリピンの国民国家形成と深く結びついており、近代フィリピンのシンボルとなっていく過程が本章で克明に描き出される。

第8章では、民族舞踊が学生組織やコミュニティにおいて盛んに演じられるが、なぜこの舞踊がフィリピン系アメリカ人に受け入れられるようになったのか、そこで表現されているフィリピンとは彼らにとってどのような意味をもつのかを論じる。民族舞踊はその魅力からフィリピンという国民国家のシンボルとしてフィリピン系にも共有されていく。しかし、一方で、学生にとっては「祖国」は否定される対象からエスニシティを支えるシンボルへと転化されていくが、他方で、コミュ

ニティ民族舞踊団の場合「祖国」は遠隔地ナショナリズムの対象となることが多く、それぞれの集団の特性によって「祖国」は異なるレベルで「想像」されがちであることを明らかにしていく。

第9章では、多数の移民を送り出すフィリピン当局が彼らとどのような関係を構築しようと試みているのかを、移民とのナショナルな結びつきを創り上げようとする政策に注目して論じる。こうした政策、たとえば二重国籍制や海外フィリピン人委員会の設置などは「国境を越えた国民化」と捉えられるが、その具体的な施策、そしてその成果と限界を明らかにする。第10章では、本論文で取り上げられている学生たちの場合も少数ではあるが、フィリピンの反政府運動に関わるものがあることを示す。さらに、彼らがこうした行動を行うようになった背景を論じ、遠隔地ナショナリストを生み出す状況を明らかにする。

以上のように、フィリピン系アメリカ人学生は、いまだに祖国フィリピンと居住国アメリカの間で揺れ動き、単にフィリピンをエスニック・アイデンティティの対象とするだけでなく遠隔地ナショナリズムの対象とすることもある。それが出身階層、世代、育ったコミュニティの状況、そして出身国政府の政策等々、によって異なってくることを終章に示している。なお、巻末には「資料1 サンディエゴ及びサンフランシスコにおけるフィリピン系学生組織に関する調査」が付されている。

論文審査の結果の要旨

本申請論文は、グローバル化した状況においてフィリピンという最大の移民送出国からアメリカという最大の移民受け入れ国に移り住んだフィリピン系アメリカ人の学生組織におけるエスニシティとナショナリズムの立ち現れ方について、長年のフィールドワークと豊富な資料から考察を試みた国際社会学的研究である。

移民のエスニシティとナショナリズムに関する研究は、これまで、アメリカやヨーロッパにおいて相当数蓄積されてきたし、日本においても少なくない。しかしながら、グローバル化した状況におけるフィリピン系学生のエスニック組織に注目した研究は少なく、本研究は研究史上のパイオニア的試みと位置づけられる。

申請者の研究の国際社会学的意義は大きく以下の三点にまとめることが出来る。

第一の意義は、ふたつのフィリピン系エスニック学生組織に注目し、そこでの活動とメンバーの意識を丹念に調査し以下の点を明らかにした点である。すなわち、学生の多くが中流出身でありながらも、アメリカ社会に色濃く残る人種差別とフィリピン系への差別という二重の差別によってエスニック意識やナショナリズムが覚醒されたり、遠隔地ナショナリズムが醸成されたりするパターンを、出身階層、世代、育ったコミュニティの状況、そしてフィリピンの政策等の要因に関連によって構成されていることを丹念に描き出している点である。一般に、時代を経れば移民もホスト社会に統合されていく。だが、フィリピン系アメリカ人の場合は、古くからの移民がいる一方で1965年の移民法改正以降の新移民が大量にアメリカを訪れており、いまだにエスニック・コミュニティが活性的である。また、マニュアル労働者が多い反面専門職移民も少なくないという多様性があり、同じアジア系でもモデルマイノリティとしての日系や中国系のアメリカ人と違い、事情が複雑なエスニック・グループである。とりわけ、このことが学生組織に先鋭的に現れていることを体系的に示した点は注目される。

第二の意義は、学生組織やコミュニティにおいて、フィリピンを象徴するものとして民族舞踊がもてはやされている背景を、フィリピンという国民国家が「想像」される際に「伝統の発見」によって民族舞踊が「想像」された経緯を明らかにしている点である。フィリピンの伝統といわれるものがイスラムの踊りやスペインのその影響を色濃く受けているが、フィリピン固有の伝統芸能として広く受け入れられていく様を見事に描き出し、そしてそれがフィリピン系アメリカ人のエスニシティやナショナリズムに決定的な影響を与えていることを本論文は詳細に描き出している。

第三の意義は、フィリピン系アメリカ人をグローバル化状況の移民の典型として捉え、二重国籍などによるフィリピン政府の「国境を越えた」国民化政策と遠隔地ナショナリストの活動などと関連づけて考察している点である。グローバル化によって人々は容易に国境を越え、しかもインターネットなどで祖国の情報に簡単にアクセスできる状況となっている。他方で、この状況に対応して国民国家も海外同胞を国民として取り込む政策をとる。本論文は、フィリピン系アメリカ人を事例として、グローバル化した状況のなかで複雑化した移民と「祖国」の関係を丹念に描き出している。

このように申請者の研究は、十分な時間と目配りによってじつに丹念になされている。しかしながらいくつかの点で不満も残る。まず、様々な角度からアプローチされているが、分析のレベルが一貫しておらず各章につながりが見えにくい点で

ある。また、鍵概念がフィールドワークに十分ひきつけられておらず、概念と事例とがいまだ十全にはかみ合っていない点である。

しかしながら、これらの問題点を考慮しても、本論文の優れた意義が損なわれることはない。したがって、本論文は比較文明論研究をめざして創設された共生文明学専攻比較文明論講座にふさわしい内容を備えたものと言える。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成19年1月18日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。